



ようこそ！ もの忘れ外来へ

認知症の新しい生活障害の見方

認知症の人の症状は、中核症状とBPSDの大きく2つに分けて考えることが一般的です。中核症状にはもの忘れ、見当識障害（時間や場所がはっきりしない）、判断力の低下、遂行能力の低下（仕事や家事の困難など）が含まれます。BPSDにはすぐ怒る、物を盗られたといったもの盗られ妄想、徘徊などがあります。このような症状の理解は間違いではありませんが、実際の生活の中で本人がどのように困っているのか、本人に見えている世界がどのようなものかについてわかりやすい症状の見かたを紹介しましょう。

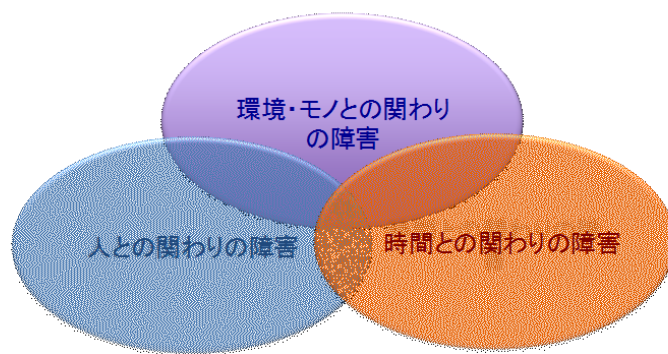
認知症の人の生活障害を、「環境・モノとの関わり」、「人との関わり」、「時間との関わり」といった視点から見るとどうでしょうか。例えば、買い物がかまかできない、調理するのに今まで使っていた電子レンジの使い方がわからないといった症状は「環境・モノとの関わり」の障害が原因です。「人との関わり」の障害では、他人の意図を理解できずに人とのコミュニケーションが上手く取れなくなります。さらに、自分を客観的に見ることができないので家族からの指摘にそんなことはないと怒り出したりします。特に軽度認知機能障害や軽症の認知症の人では、自分の生活の乱れを自覚できない（これを病識の欠如といいます）ことが診断の助けになる場合もあります。生活の大事な予定を忘れたり、何回もしつこく確認する、数年も前のことを今起こったことのように感じて家族に話すなどは「時間との関わり」の障害と言えるでしょう。時間の経過の中で起こったことを順番に整理できないので、話す内容や行動に脈絡がなく家族から見るとおかしいと思える行動を取ることもあります（図1）。

認知症の人から周りの世界がどのように見えているかを理解できると、その生活の困難が伝わって共感することも可能になります。認知症の人への介護や手助けも、まずはその人が何で困っているのかを実感できると、より親密で適切にものになるでしょう。家族や介護者がこれまでは腹立たしく思っていた行動や言動を、こうした視点を持つことで、理解や共感をもって受け入れるようになりお互いの関係性が良くなることを期待します。

【図1】



共感し、支援につなげるための認知症の人の生活障害の見かた



（京都橋大学 小川敬之先生資料を参照）

ドクター岡原の今月のひとこと！



今月号で紹介した認知症の人の症状を、「環境・モノとの関係性の障害」、「人との関係性の障害」、「時間との関係性の障害」という視点から見るとという新しい考え方、そして高齢者の認知症の人の生活のあり方について簡単な冊子を作りました。ツムラという漢方薬のメーカーと私とで共同で作成したものです。わかりやすく、家族で回し読みすることができるように短くまとめてあります。受診される家族や介護者など、多くの方に持ち帰っていただき、自宅や施設で読んでいただけることを願っています。